国語科教科書のリライト過程の分析
—「国語教育」の脱アイデンティティの契機—

佐々木　奈月（東北大学大学院修了生）

1.　問題関心

1.1　外国につながる子どもと日本の学校

日本国内における外国につながる子どもの教育機会の保障について、関心が高まっている。その課題としては、学習機会の確保、学力の維持・向上、母語・母文化の保持、進路選択など多岐にわたる。これらは、参入する学校の教育方針に影響を受けやすいと考えられるが、金銭的・地理的・制度的（日本の受験や就職システムとの接続性）制約から、日本の公立学校が現実的な選択肢となりやすい。

文部科学省では 1991 年度から「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」を実施し、子どもの増減や分布等の把握に取り組んでいる。本研究では、この「日本語指導が必要」という指摘ないしは認識に着目する。基本的に、日本の公立学校は、日本国民に対し、日本国民としての素養を身に付けさせることを目的としている。そこでは、「言うまでもなく」、日本語で教育が行われる。つまり、「日本語が必要とされる状況において、必要とされている日本語が使えないという状況」があってはじめて、「日本語指導が必要な児童生徒」が「発生」する。そして、「必要とされている日本語」が（まだ）使えない子どもは、学習参加が極めて「困難」になる。

1.2　リライト教材の考案

このような状況に置かれている子どもに対して、なるべく早い段階から、年齢に応じた学習を可能とすることを目的とした教材として、国語科教科書のリライト教材（以下、リライト教材）が考案された（光元・岡本、2006）。基本理念は、「表現はやさしく、内容は学年相当で」である。国語科を取り上げる理由として、日本語への依存度が高く（傍点筆者）、指導が困難な教科であること、その一方で、国語の教材は、様々な分野の内容を含んでおり、子どもの知的な興味を刺激し、学年相当の思考をさせるにふさわしい教材であることが挙げられている。ここには、「日本語が必要とされる状況」において、「必要とされている日本語が使えないという状況」における教師側の「困難さ」が表れている。

では、子どもと教師にこのような「困難さ」を生じさせる根本的な要因とは何なのか。

1.3　「国語教育」のアイデンティティ

国語教育学者の田近（2014）によると、「国語教育」とは、母語としての日本語の教育であり、歴史的には、1900 年の「小学校令」改正に伴って「国語」が教科名として成立した。その背景には、近代国家との相関的概念としての「国家の言語」、すなわち、「国家語」意識があり、「国語教育」の語は国民に共通の正しい自国語の教育を意味してきたとし、単なる「言葉の教育」や「言語の教育」という以上の、自国語の教育としての規範性の強さを示していると説明している。つまり、「国語教育」は、日本（国家）・日本人（国民）・日本語（国語）という要素で構成されており、その結びつきを強め、「日本＝日本人＝日本語」という図式を形成する意図があった。

2.　研究の目的

上述の図式を形成してきた「国語教育」の文脈の中で、教師が外国につながる子どもの様々な状況を想起し、既存図式への統合（＝同化）ではないかたちで、教育を実践しようとする時、どのような葛藤と調整が生じるの

か。国語科教科書のリライト教材作成を事例として取り上げ、考察する。

3. 分析データと方法

ボランティア団体Aから提供を受けたリライト活動の議事録をデータとした（2007 年～2011 年、全 6 単元、計 48 回分）。団体 A を選択した理由は、①リライト活動の蓄積がある、②リライト活動以外にも、外国につながる子どもの学習支援に取り組んでおり、その実態を経験的に知っているためである。

リライト活動は、月 1 回、約 2 時間、元教員、日本語教師、学生等で行われている。

分析軸として、「表現はやさしく」を方法・手段上、「内容は学年相当で」を内容・目的上の課題とみなし、リライト過程から抽出した。

4. 分析結果（事例＝斜体、下線部＝筆者）

4.1 「表現はやさしく」に関する葛藤・調整

＜日本語を使わない・使えない＞

実用性のある教材にするために、子どもに説明できる・伝わる確率が高そうな日本語にする必要があるが、難しい。削除、視覚化、選択式、妥協等により調整を図る。

・「結局」の言葉が見つからない。「とうとう」という感じをどのように表わせばいいのだろう。（小 6／物語文）

・「ちいちゃんじゃないの。」の「じゃないの」は難しいので、国語では使わないが「？」マークを使ってみる。（小 3／物語文）

4.2 「内容は学年相当」に関する葛藤・調整

＜学習目標は学年だけでは決まらない＞

日本人の子どもとの対比や関係性を軸に学習目標の正当性や妥当性を検討する。

・「せっちん」ということばを、（自国に）帰国する子どもが知る必要があるか、あるいは、所属するクラスの子どもと同じように知った方がいいか、迷った。」

（小 3／物語文）

・日本人の子どもの学習目標と同じでよいのではないか。

・表現する力は日本人の子どもと違うが、1 年生なので感じ方はあまり変わらないと思う。

・1 年生といっても、耳にする話し言葉で、日本人の子どもにはわかっても、外国人の子どもにはわからないことがあると思う。

・そういうわからないことを意識して取り上げる必要があるのではないか。

（小 1／物語文）

5. 考察・結論

「国語教育」の目的かつ手段である「日本＝日本人＝日本語」という図式との齟齬や摩擦が、外国につながる子どもとその多様性に向き合おうとする教師の「困難さ」につながっている。これを乗り越えるための試みの一つがリライト教材であった。その作成過程から観察された「葛藤」・「調整」から、次の 2 点を結論として挙げる。既存図式に一致しない外国につながる子どもへの「国語教育」は、第一に、個別調整が必要なものになる。つまり、日本語が通じる日本人に一斉指導で効率よく教育することを想定している「国語教育」の方法・手段が成立しなくなる。第二に、「国語教育」の内容・目的の一つである日本に関する知識や日本人的感覚が相対化され、それらを習得することの正当性や妥当性が問われることになる。

【引用文献】

田近洵一（2014）「国語教育」今野喜清・新井郁男・児島邦宏編『第 3 版 学校教育辞典』教育出版, pp. 319-320.

光元聰江・岡本淑明編著（2006）『外国人児童・生徒を教えるためのリライト教材』ふくろう出版.